

明神山系遺跡分布調査概報Ⅱ

1985年度

1986年3月

柏原市教育委員会

は し が き

柏原市が、単独で文化財行政に取り組み始めてから、約6年の歳月を経ました。この間、数百件にのぼる発掘調査を実施してきましたが、大部分が土木工事等に伴う事前緊急発掘調査であり、期間や費用に大きく制約を受けた発掘調査に追われる毎日でした。

昨年度と今年度の二年間にわたる明神山系遺跡分布調査は、このような現状を打開し、本来の文化財保護行政に基づくものであると言えます。将来の開発が予想されるにもかかわらず、従来、分布調査が全く行なわれていなかった明神山系の遺跡分布状況を確認するために計画されたもので、その主旨を十分に理解して頂いた文化庁から、多額の補助金を得て実施したものです。

分布調査の結果、数々の成果をあげることができ、その成果は、昨年度の概報『明神山系遺跡分布調査概報Ⅰ』と本書に尽くされています。しかし、これらの成果は、地表に対しての観察によるものだけであり、更に多数の文化財が地下に埋蔵されている可能性があります。

柏原市教育委員会では、この成果に基づき、今後の明神山系の開発に対応していきたいと考えています。しかし、私達のこの成果を利用しなくともよい状況、つまり、明神山系の開発が行なわれないことが最も望ましい姿だと思います。埋蔵文化財と共に、豊かな自然環境に恵まれた明神山系の山並みが、子々孫々まで、今の美しい姿を留めていけることを願ってやみません。

昭和61年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、昭和60年度国庫補助事業（総額2,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、社会教育課文化財担当が実施した、柏原市田辺2丁目、国分本町7丁目、国分東条町所在の明神山系を中心とした埋蔵文化財分布調査概要報告書である。今回の調査は、2年計画の2年目にあたるものである。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課、安村俊史を担当者とし、昭和61年1月7日に着手し、昭和61年3月31日をもって終了した。
3. 本書の編集・執筆・製図・写真はすべて安村が担当した。
4. 調査に際して、土地の立ち入り等を許可して頂いた地元の方々に深く感謝する。今後とも協力をお願いしたい。
5. 本書で使用した方位は全て磁北である。なお、真北は約6°東に偏している。また、標高はT、P、であるが、三角点、水準点から移動させたものではなく、多少の誤差を含んでいることを断つておく。
6. 調査・整理の参加者は、下記の通りである。

石田 博	竹下 賢	北野 重	桑野 一幸	田中 久雄
谷口 京子	仲井 光代	秋田 大介	伊藤 芳匡	稻岡 利彦
今中 太郎	清瀬 健二	西 一晃	西村 威	松下 修
江波佐知子	中田ゆかり	藤本 直美		

目　　次

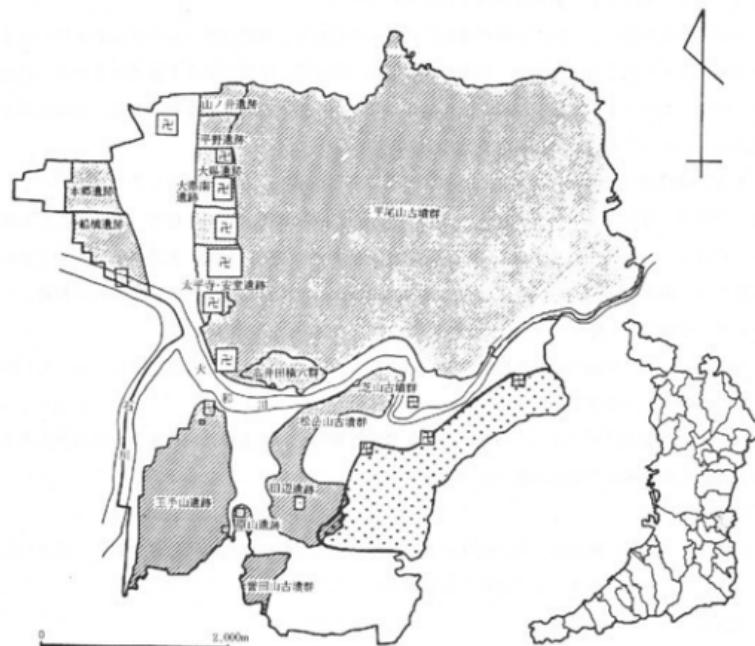
第1章 分布調査の目的と方法	1
第2章 分布調査の成果	2
第3章 小字名の調査	4
第4章 北峯古墳群の実測調査	7
第5章 総括	10

第1章 分布調査の目的と方法

調査の目的と方法の詳細は、『明神山系遭跡分布調査概報Ⅰ』を参照して頂くことにし、ここでは簡略に述べることにする。

柏原市の遺跡密度は非常に高いが、調査対象地周辺は空白地となっており、分布調査が望まれていた。周辺には古墳時代後期から奈良時代にかけての田辺古墳・古墓群、田辺廃寺・河内国分寺・河内国分尼寺・東条尾平廃寺等の寺院跡が確認されており、調査対象地内にも遺跡が存在することは予想されていた。存在する可能性のある遺跡は、弥生集落、後期古墳、火葬墓、寺院に伴う集落・瓦窯、中世山城などである。

調査は昭和61年1月7日より、小字の調査等に着手し、2月1日から現地踏査、2月13日から昨年度に発見した古墳の実測に取り組んだ。その間に、整理作業、概報作製作業に従事し、3月末日をもって、2年間にわたる明神山系遺跡分布調査を終了した。



分布調査地位置図

第2章 分布調査の成果

分布調査範囲を道、地形などによって30区に区分し、昨年度は第1～20区の分布調査を実施し、本年度は第21～30区の分布調査を実施した。以下、地区ごとに調査成果を記述していく。

1. 成果

第21区

河内国分寺の東側に位置する。山麓部はぶどう、みかんの果樹園が多く、一部に杉の植林がみられる。他は荒地、もしくは広葉樹林である。地表観察が困難な部分が多く、遺物・遺構は認められなかった。

第22区

地元の農家の人にから、「ジョウガシロ（定ヶ城？）」と呼ばれる城跡があると教えて頂いた地区にあたる。この情報は、他からも得ており、全地区を踏査した後、念のために再度、調査を実施したが、城跡を示す遺物・遺構は認められなかった。

第22区中央の谷に、三段の石垣が認められ、この石垣を、城跡に伴うものと伝承されているのではないかと思える。しかし、石垣の長さは20～30mで、尾根に至らず途切れている。石垣は階段状になるが、平垣面には梅の木が植えられた後、現在は荒地となっている。この石垣を城跡に伴うものと考えるのは困難であろう。

また、府県境付近には人工的と思える平坦面が多く、確かに山城が存在してもおかしくない地形である。更に、奈良県香芝町内も一部踏査をし、同様の地形が更に拡がっていることを確認している。しかし、人工地形か自然地形かを決定できる資料はなく、土壘や濠等は全く認められない。地面には落葉が厚く重なっており、表面観察が困難であったことが原因とも考えられるが、遺物は全く採集できなかった。

小字名からも、城跡の存在を裏付けるものではなく、敢えて考えるならば、「立割」か、人工的な地形改変を示す小字名かもしれない。

以上から、第22区周辺は、山城跡の存在も可能な地形を呈するが、それを裏付ける物的証拠は認められず、今後の検討課題としておきたい。

第23区

山麓はみかん畑、傾斜地は杉の植林が多くみられ、表面観察は比較的容易であり、見通しもよくきくが、遺物、遺構は全く認められなかった。

第24区

杉の植林、もしくは荒地が広がっている。傾斜はかなり強く、遺物、遺構は全く認められなかった。

第25区

杉の植林が多く、府県境付近は照葉樹林が多く認められる。照葉樹林は、自然林と考えられるが、最近、かなり伐栽されているようである。遺物、遺構は認められなかった。

第26区

東条尾平廃寺の南西部に位置する。東条尾平廃寺は、鉄工金属畠地の造成に伴って調査され、鎧田寺跡と推定されている寺院跡であるが、主要御藍等は不明のまま、破壊されてしまった。

山麓部はみかん畑が多く、鶏舎もみられる。傾斜地には一部に杉の植林も認められるが、大部分が照葉樹林、荒地である。遺物、遺構は確認できなかった。

第27区

後世の削平によって、地形は大きく改変され、階段状をなす。荒地が広くみられ、遺物、遺構は認められない。

第28区

小さい尾根と谷が、複雑に入り組んだ地形を呈する。照葉樹林が広くみられ、見通しは悪い。遺物、遺構は認められない。

第29区

杉の植林地が多く、地形の起伏は少ないものの、傾斜はかなり強い。見通しはよくきくが、遺物、遺構は認められなかった。

第30区

今回の調査対象地内の最高所、通称「明神山」と呼ばれる標高278.1mの山塊の西斜面にある。杉の植林、もしくは照葉樹林が広がっている。地図上では、大和川の南側の最高所、しかも府県境に位置することから、弥生時代の高地性集落が存在する可能性を考えていた。しかし、現地を歩いてみると、立っているのも困難な急斜面であり、遺跡の存在する可能性は極めて低いものと考えられる。遺物、遺構は全く認められなかった。

2.まとめ

要するに、本年度の分布調査では、遺物、遺構共に全く確認できなかった。大和川にのぞむ、北側の急傾斜面であるため、当初から遺跡が存在する可能性は低いと考えていたが、それを裏付ける結果となった。しかし、遺跡が存在しないことが確認できたことは、逆に、大きな成果であったと考えている。

その中で、第22区周辺のみは、地形や地元の伝承から、山城が存在する可能性があり、今後も、注意をしていかなければならない地区である。

第3章 小字名の調査

遺跡の存在を推定する方法として、地名等から推定する方法がある。これは、地表観察だけに頼る分布調査を補う方法として有効である。そのため、本年度の分布調査に伴って、調査対象範囲の小字名を拾い上げ、小字地図を作製した。本書では、各地区ごとに、小字名のみを列挙しておきたいと思う。

第1区

帯山、石ヶ原、上ノ谷、中尾、古峯

第2区

北峯胡摩谷、美ノ浦、北峯美ノ浦、帯山、美ノ浦垣内、古峯、車ノ上

第3区

野田、美ノ浦、重ノ上、胡摩谷、北峯胡摩谷

昨年度の分布調査によって、遺物散布地と確認された地区は、「北峯胡摩谷」に、2基の古墳が発見された地点は「野田」に位置する。

第4区

北峯袋持、地藏ヶ谷、袋持、野田、屏風ヶ浦

第5区

上ノ山、清水阪

第6区

上ノ山、北峯、野田、清水谷

第7区

北峯

第8区

北峯、楚輪大谷、野田大谷、袋持、野田

第8区で8基の古墳が発見された地区は、「楚輪大谷」から「北峯」にかけての地区である。

第9区

北峯、楚輪大谷、地藏ヶ谷、野田、北峯袋持

第9区-1・2号墳は「地藏ヶ谷」に位置し、第9区-3号墳は「楚輪大谷」に位置する。

第10区

楚輪山ノ下、糖手天ヶ辻、糖手、東条ノ上、尾崎、尾咲、楚輪、上の谷、植木谷、堂山、尾崎向山、墓の上、下垣内、尾崎南原、北谷、坂口、中谷、釜ヶ原、堂ノ上、中尾、南谷、中尾清水、中谷清水、清水阪、大芝、大芝セコ

第11区

東条内垣内、東条、内垣内、門田、糖手垣内、糖手、堤垣内、大林、尼寺、東条前、門田尼寺、東条ノ上、楚輪、糖手天ヶ辻、上ノ山、后後、判田、久保ケ内、西ン条祭神、下垣内、南シ代二階ケ浦、二階ケ浦、尾崎二階ケ浦、植木谷、尾崎向山、東条下垣内、尾崎下垣内、尾崎河内国分尼寺の所在を示すと考えられる「尼寺」の小字名がみられる。ほかに、「垣内」に関連する地名や、「門田」「久保ケ内」等の地名が注目される。

第12区

平田、垣内、崩田、垣内茂、山田、炎、三反地、水落、岡ノ垣内、水落大、垣内光、杜の本、杜ノ本糖手、糖手、中尾、糖手中尾、ヌク谷、風呂ノ垣内、岩ノ上、東条内垣内、東部、内垣内、糖手大谷、糖手山ノ下

第13区

山の裾、岩之上、東条ノ上、柚木、糖手、楚輪山下、楚輪

第14区

糖手大谷、糖手、東条、楚輪大谷、岡ノ垣内、楚輪山下、楚輪

第15区

糖手、糖手山ノ下、楚輪、炎、糖手大谷、大谷、上り尾、北峯頭巾上

第16区

山田、山田三反地、タルミ畑、垣内、楚輪、崩田、細山尾、崩谷、落田、手箱

「崩田」「崩谷」のように、山崩れを示すと考えられる地名がみられるが、現在でも、山崩れが多くみられる地区である。

第17区

杜ノ本、上り尾、川合谷、水谷、細山

河内国分寺に隣接する森本明神に関連すると思える「杜ノ本」の小字名がみられる。

第18区

楚輪、上り尾、北峯、北峯頭巾上

第19区

楚輪、上り尾、水谷、楚輪細山

第20区

上り上、水谷、楚輪、楚輪細山、北峯頭巾上、北峯

第21区

二の尾、养山、上り尾、楚輪、水谷、大東、杜の本

第22区

养山、銚子加、楚輪

第23区

二ノ尾、大谷口、下り尾、一ノ坂、尾平

第24区

尾平、立割

第25区

尾平、立割

第26区

一ノ坂、横尾、横尾一ノ坂、太平、下り尾、友平、下り尾藪ヶ谷、尾平、大谷口

第27区

ヤケ山、大谷下、大原大谷、西ヶ谷

第28区

大谷、大谷下、ヤケ山、西ヶ谷

第29区

大谷

第30区

大原、大谷口、大谷、大谷割山

小字名を概観すると、谷、尾根、山、原等の自然地形に由来すると考えられる地名が、圧倒的に多い。特に傾斜の強い第27区から第30区にかけては、「大谷」のように、険しい地形を示す小字名がみられる。非常に広範囲に広がっている「楚輪」の小字名も、つまり山の険しい所を示すものと考えられる。

第10区から第12区にかけては、「垣内」や「堂の上」等の小字名がみられ、注目される。中世の集落に因るものであろうか。また「尼寺」の小字名が残っていることは、以前から注目されており、河内国分尼寺の所在を示すものであろうが、一方、河内国分寺に関する小字名が全く残っていないことは不思議である。

昨年度の分布調査で発見された古墳、および遺物散布地に関連する小字名も見出し得なかった。また、前述のように、山城に関連する小字名も見出し得なかった。

以上のように、小字名の抽出による成果は、ほとんどみられなかつたが、今後、更に検討を加えることによって、新たな遺跡の存在を推定できる可能性もあり、今回の資料を生かしていきたいと考えている。

第4章 北峯古墳群の実測調査

昨年度の分布調査によって確認された古墳は、第3・8・9区にわたって、計12基である。今年度の分布調査によって、第8区で新たに発見された古墳1基加えると、13基になる。この一帯には、更に多数の古墳が分布していると考えられる。

最も古墳が集中している地点は、第8区の小字楚輪大谷であるが、楚輪大谷を取りまく広い範囲の小字名が「北峯」であり、本古墳群を『北峯古墳群』と仮称する。そして、各古墳を、1～13号墳とする。10・11号墳が古墳と断定できるものでないことは、既報告の通りである。また、12・13号墳は、別の古墳群として把握するほうが適切かと思うが、便宜上、北峯古墳群の一部としておく。（図版3）

今年度の分布調査に伴って、1～8号墳の石室実測調査と、周辺の地形平板測量調査を実施した。以下、各古墳の実測成果を概略しておきたい。

1号墳

直径8m前後の円墳と考えられる。墳丘封土は、かなり流失しており、石室前面は削平を受けている。

内部主体は、横穴式石室であり、おそらく無袖式であろう。開口方向は、S-15°-W。石室長428cm以上、奥壁での石室幅108cm。石室内には、かなりの土が流入しており、現況での石室高136cm。。自然石の乱石積みによって構築されている。

奥壁は長さ1m弱の横長の自然石を5段に積み上げ、3段目は2石を使用している。側壁は長さ80cm前後の横長の自然石を下半に使用し、上部は長さ30～50cmの横長の自然石を使用している。いずれも、平滑な面を内面に向けている。天井石は3石が残るが、更に1石存在したと考えられる。

左壁中央の石に、線刻がみられる。細く浅い線で、不明瞭なものが多いが、帆を張った舟と確認できる絵がある。しかし、後世の落書きの可能性も充分に考えられる。

2号墳

2号墳は直径6m前後の中円墳と考えられる。石室前面の石材は、かなり失なわれているようであるが、最下部の石材は、埋もれると推定される。側壁の石も、いくつか失なわれており、天井にも隙間がみられる。自然石の乱石積みであるが、2号墳の積み方は最も粗雑である。

おそらく、無袖式の横穴式石室と考えられ、開口方向は、S-1°-W。石室長263cm以上、石室幅は、奥壁で120cm現存する最前面で100cmである。現況での石室高は約100cm。

奥壁は1石を置き、天井との境に、小形の石を使用する。右壁は長さ100cm前後の方形に近い石を3石置き、上部は30cm前後の自然石を積みあげる。それに対し、左壁は長さ50cm前後の不定形の自然石を多数使用し、上部と下部に石材の異なりは認められない。天井石は、3石が現存するが、奥から入口にかけて、徐々に低くなっている点を指摘できる。

3号墳

3号墳は直径12m前後の円墳と考えられ、墳丘も比較的残っている。

内部主体は両袖式の横穴式石室であるが、袖の幅は両壁共に約20cm前後と狭い。石室長641cm以上、玄室長311cm、玄室幅164cm、玄室高は、最も高い部分で200cmである。羨道長330cm以上、羨道幅126cm、羨道高108cm。自然石の乱石積みであり、開口方向は、S-9°-W。

奥壁は4段に積み上げられ、持ち送りが顕著である。側壁も若干の持ち送りがみられ、基本的には3段から成る。奥壁と右壁の境は、明瞭ではほぼ直角をなすが、奥壁と左壁の境は、非常に不明瞭である。おそらく、奥壁から左壁へ続いて石を置き、その後に右壁に石を置く工程を繰り返して築かれたものであろう。玄室天井石は3石からなり、奥から1石目と2石目の境が最も高く、羨道部にかけて低くなる。羨道天井石は1石のみ現存する。

奥壁や右壁の一部に、線刻が認められるが、これも落書きか否か判断できるものではない。

4号墳

4号墳は直径10m前後の円墳と考えられる。横穴式石室は右片袖式で、S-22.5°-Wに開口する。石室長は424cm、玄室長234cm、玄室幅148cm、玄室高188cm。羨道長190cm以上、羨道幅112cm羨道高124cm。

壁面は不揃いの自然石を乱石積みに積んでいる。袖幅は32cmで、床面では明瞭であるが、床面から3石目の石は、玄室壁面と羨道壁面にまたがって置かれており、その石から上部では、袖はみられない。

天井石は、玄室2石、羨道2石から成る。いずれも、下面是ほぼ水平を成しているが、羨道天井石下面は、玄室天井石下面より約40cm低くなっている。石材が置かれた順序は、羨道天井石の玄室側、いわゆる見上げ石が、一番始めに置かれ、順に玄室へ、羨道へと置かれている。

壁面の自然石は、基本的には平滑な自然面を内面に向けるが、割石を使用している部分もみられる。また、内面を揃えるために、表面を工具で打ち欠いている石もみられる。石材の隙間には、薄い板状の割石が多く使用されている。

5号墳

5~8号墳は、堅穴系の小形石室を内部主体とする古墳であり、いずれも石材が露出しているために確認できたものである。封土はほとんど残っておらず、築造時から、封土は少なかつたものと推定される。

5号墳は既報告でも触れたように、古墳と断定できるものではない。長さ85cmと65cmの自然

石が露出しており、その自然石下に、数個の小自然石が埋まっている。

主軸は、N-7°-Eを示し、推定長250cm、推定幅50cmである。

6号墳

6号墳も堅穴形の小形石室。天井石と思われる自然石が4石露出している。主軸は、N-11°-Eを示す。

北壁は長さ74cm、厚さ18cmの板状の自然石を立てており、側壁の一部も確認することができる。石室内法の推定長380cm、幅66cm。壁面が1段か2段かを確認することはできない。

7号墳

堅穴系の小形石室を主体とし、天井石と思われる自然石が3石露出し、その周囲にも、小さい自然石が多數みられる。

東側壁の一部と思われる石が認められるが、土砂の堆積が厚く、石室の長さ、幅共に不明である。主軸は、N-20°-E。

8号墳

今年度、各古墳を実測中に、厚く堆積した落葉の下から発見した。1号墳と2号墳の間に位置し、堅穴系の小形石室を主体とする古墳である。

横長の天井石と考えられる自然石が4石露する。3～7号墳に比べて、かなり整然と並べられている。各天井石は、80cm前後の長さを有し、東西方向に置かれている。その周囲には、側壁、もしくは天井石の隙間を埋めていたと思われる20cm前後の大きさの自然石がみられる。

石室内法の推定長180cm、推定幅60cmである。主軸は、N-1°-Wである。

以上の1～8号墳の石室を実測し、9号墳は実測できなかつたが、石室内部の写真撮影を行なつた。9号墳は、石室長約618cm、玄室長308cmの両袖式横穴式石室を内部主体とする。

1～9号墳の前後関係について考えてみると、両袖式の石室である3号墳と9号墳が最も古く位置付けられよう。石室規模も他より一段と大きい。3・9号墳の前後関係は明らかでないが、袖が明瞭で石材の積み方も整然としている9号墳の方が古くなる可能性が高いであろう。

これに続くのは、片袖式石室の4号墳が考えられ、次いで、1号墳、2号墳の順であろう。5～8号墳の前後関係は不明であるが、整然とした天井石を使用している5号墳は、比較的初期のものではないだろうか。

1～9号墳周辺は、他にも古墳ではないかと推定される地点がいくつもあり、実数はかなり増えるであろう。南へ聞く緩やかな谷斜面に営まれており、その立地から一族の墓域である可能性が強く、6世紀後半頃から7世紀代に統くものであろう。更に、最近の調査例から、8世紀代の火葬墓が存在する可能性も強いと考えられる。墓域の移動等も考えられる資料であり、貴重な成果があった。

第5章 総括

昭和59・60年度の明神山系遺跡分布調査の成果を総括しておくと、下記のようになる。

第2・3区

境界付近のふどう畑に土器散布。特に、南端に土師器片が集中する地点がある。

第3区

横穴式石室を主体とする古墳2基発見。

第8区

横穴式石室を主体とする古墳4基以上、小形石室を主体とする古墳4基以上。

第9区

横穴式石室を主体とする古墳1基、小円墳2基。

第12区

範囲北側で石室かと思える石組み。

第17区

国分寺塔跡周辺の畑内で、平瓦表探。

第22区

地元の伝承、地形等から、山城が存在する可能性。

2年度にわたる分布調査によって、古墳13基を確認した。これを北峯古墳群と仮称したが、周辺には更に多数の古墳が存在すると推定される。土器の散布地も確認されたが、予想していた寺院に関連する遺跡や、弥生時代の遺跡は確認できなかった。また、大和川にのぞむ北側斜面は傾斜が強く、北側であることからも、古墳が存在する可能性は、ほとんど考えられない。

現況は、開発されている部分もみられ、杉の植林が多くみられる。他は、照葉樹林や雑草が繁茂する荒地となっている。また、南側は緩やかな傾斜地が多いが、北側は急斜面が多く、地崩れが各所でみられる。

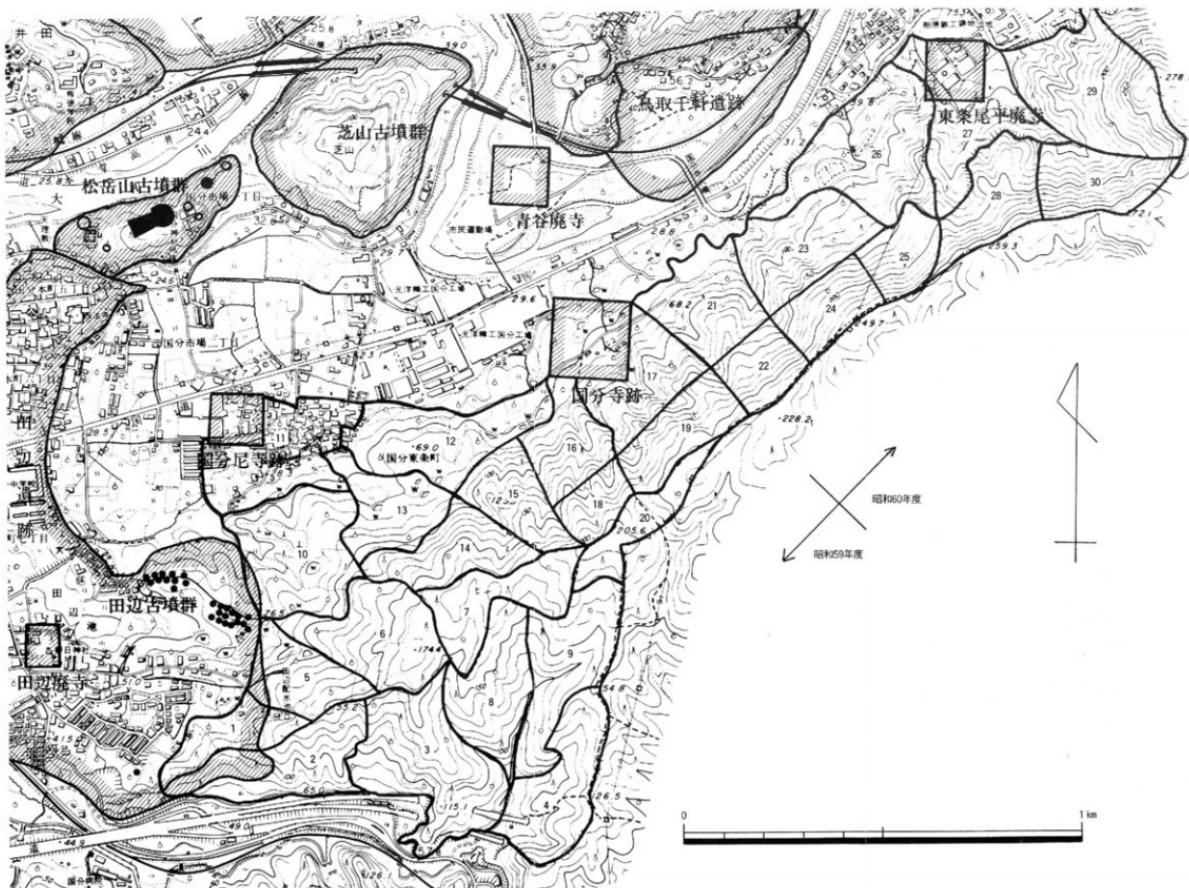
調査範囲内では、山麓部で既に開発がみられ、更に拡大していく様相をみせている。しかし、玉手山丘陵が開発され、大和川の北側の東山でも各所で開発が進んでいる現在、明神山系は開発せずに、いつまでも現在の姿を留めていて欲しいと願うものである。無秩序な開発は、文化財だけでなく、自然環境の破壊に直結するものであり、災害が生じる原因ともなる。現在のような開発は、近い将来、必ずや後悔を招くであろう。

本書が、明神山系の埋蔵文化財、そして自然環境の保護のために活用されれば、2年度にわたる分布調査は、十分な成果をあげたといえよう。

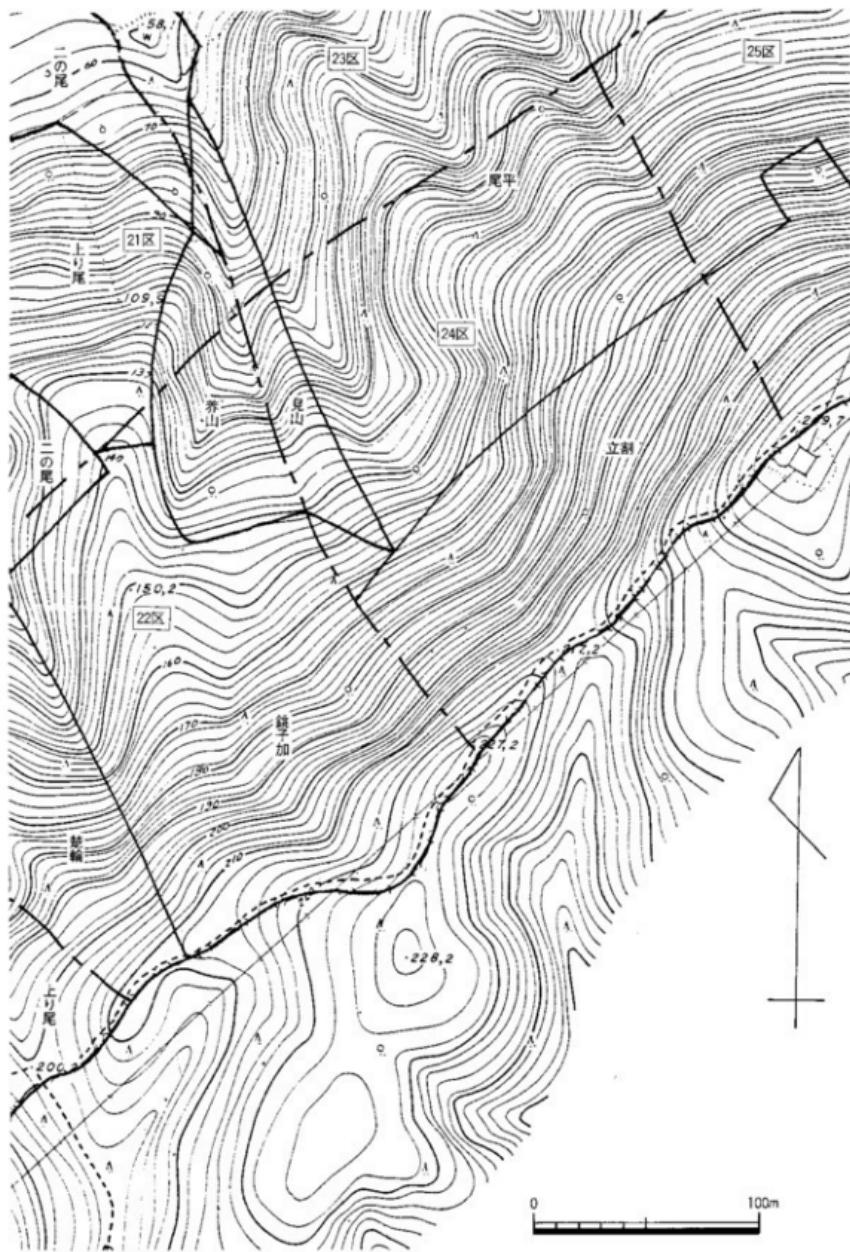
図 版

図版1

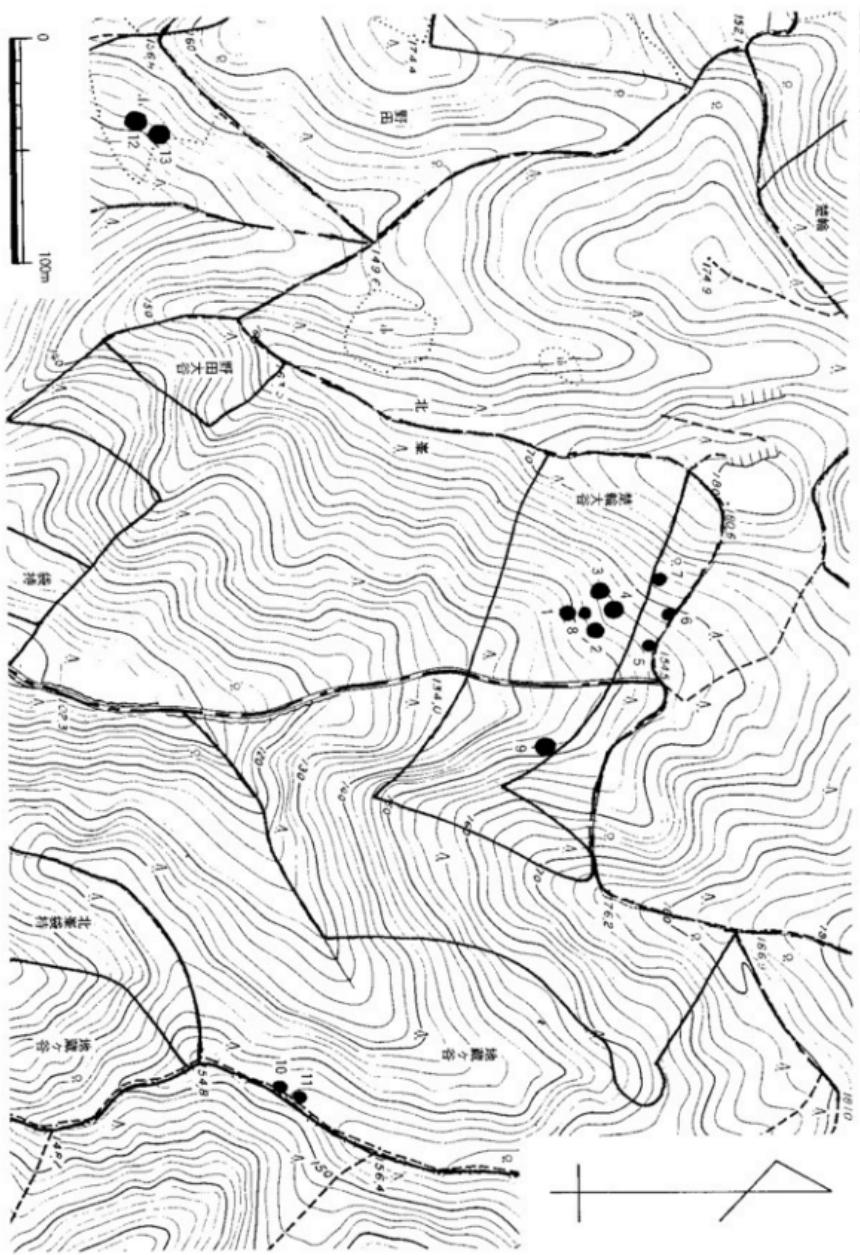
分布調査範囲地区割図



図版2 第22区周辺小字地図

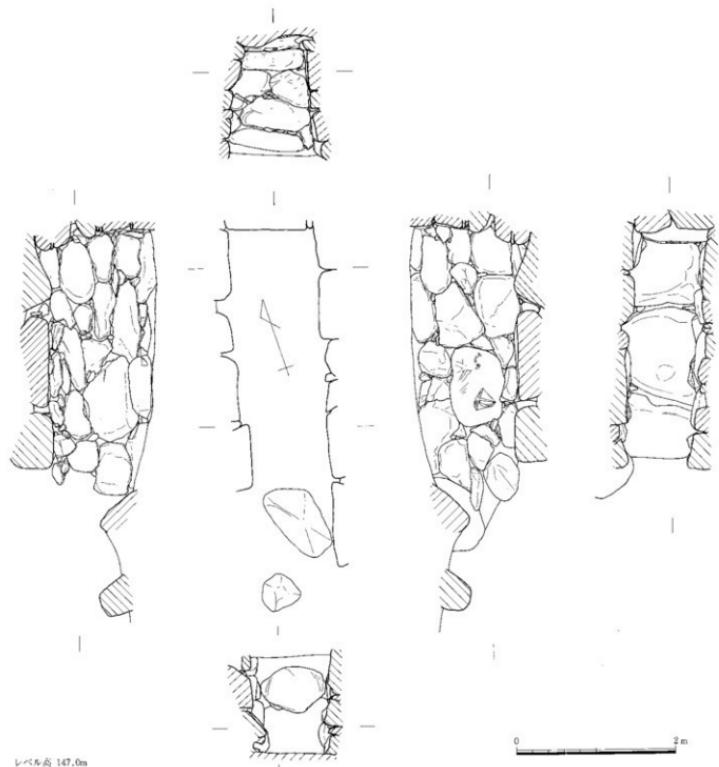


図版3 北峯古墳群小字地図

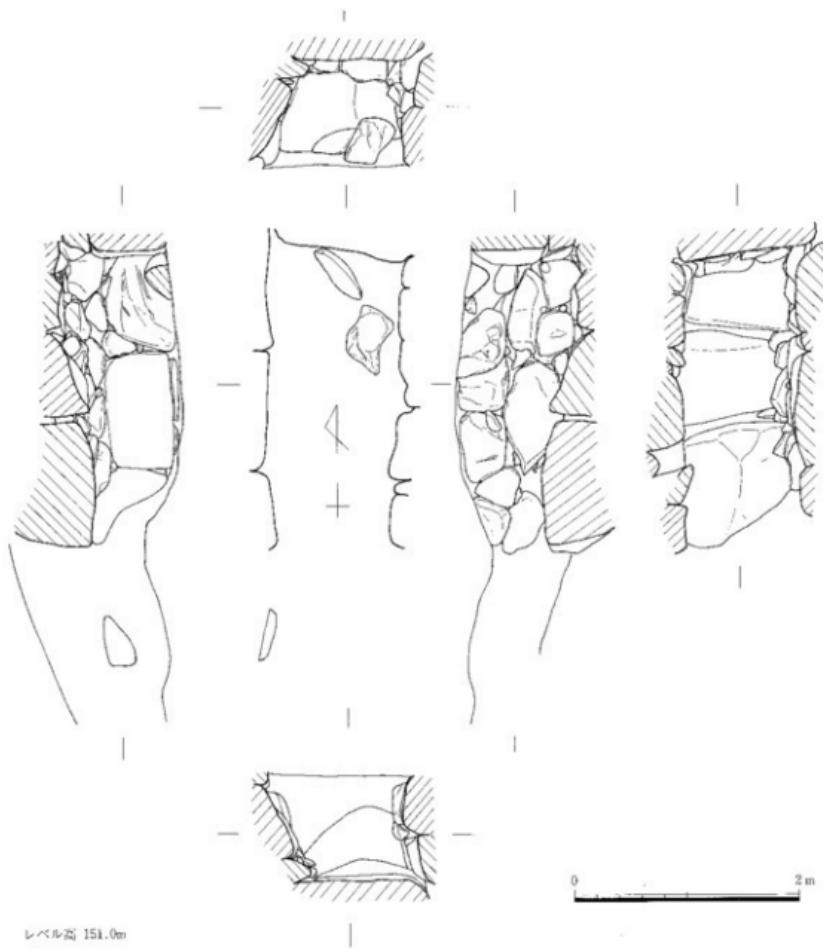


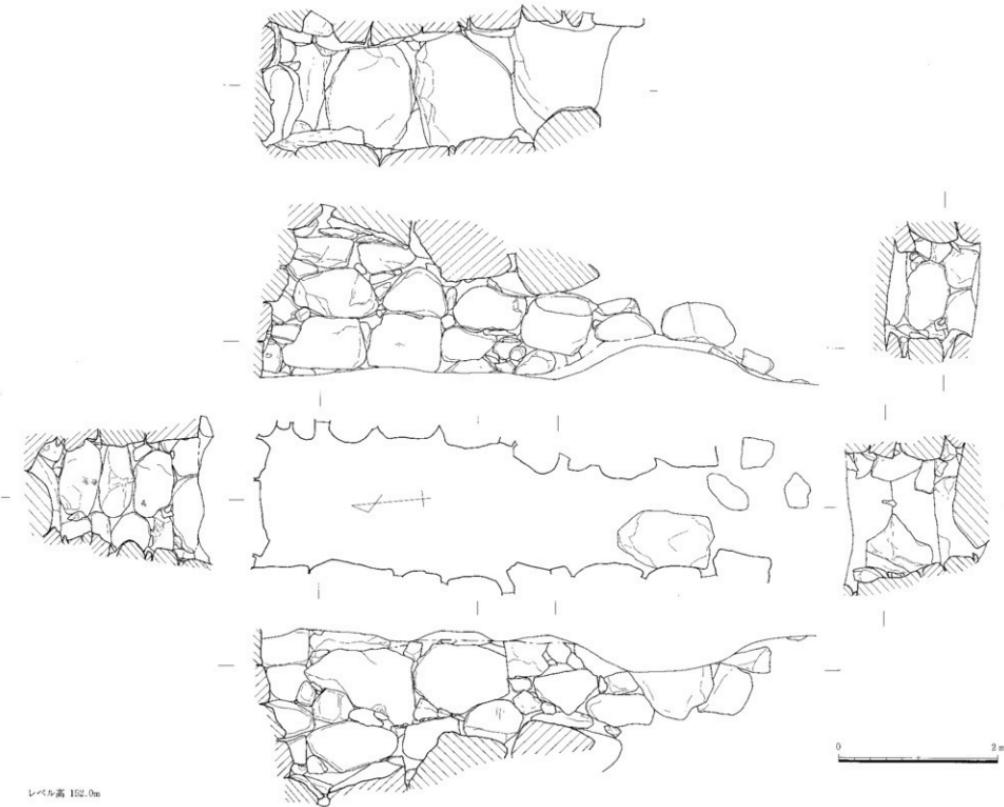
図版4 北峯古墳群地形測量図



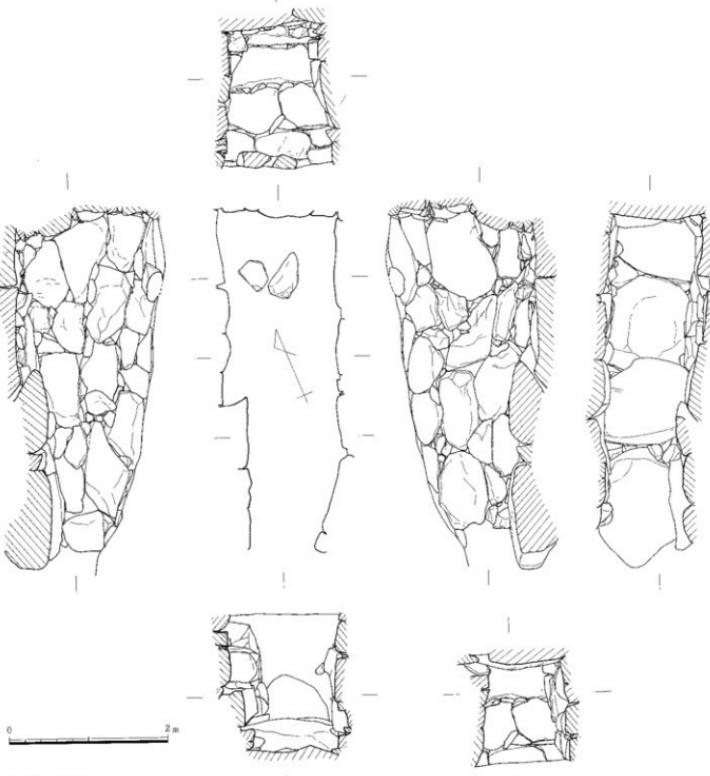


図版 6
北峯2号墳石室実測図

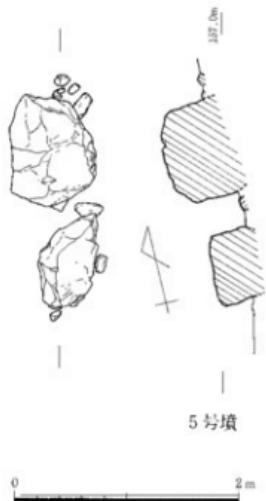




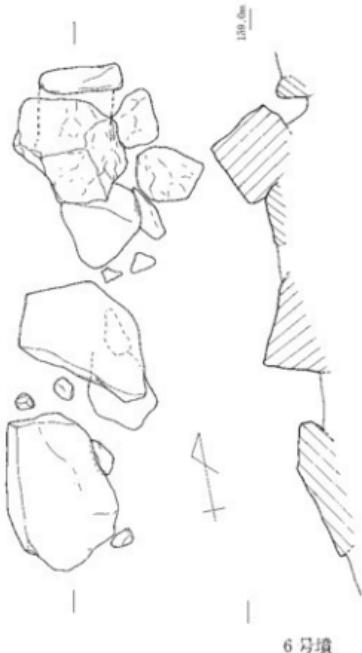
図版8 北塚4号墳石室実測図



図版9 北峯5~8号墳石室実測図



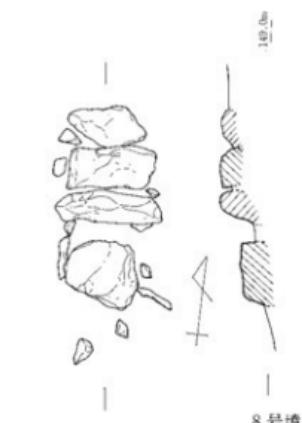
5号墳



6号墳



7号墳



8号墳



全景



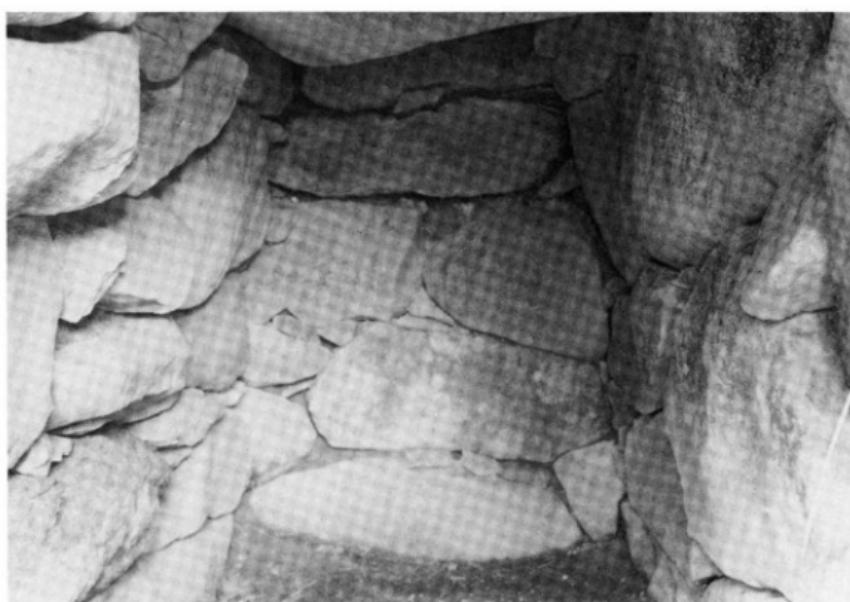
玄室



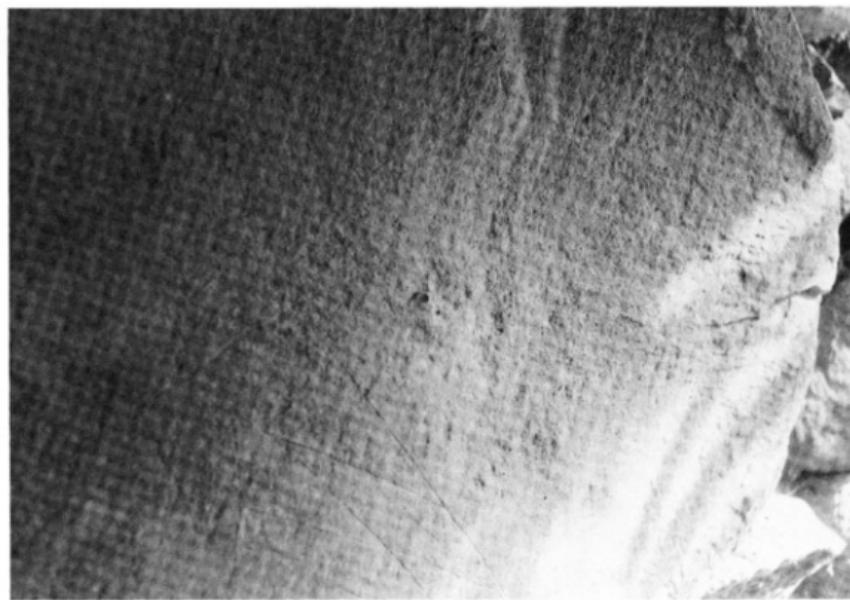
左壁



右壁



奥壁



線刻画





玄室



奥壁



左壁



右壁



全景



近景



奥壁



漢道



左壁



右壁



全景



奥壁



右壁



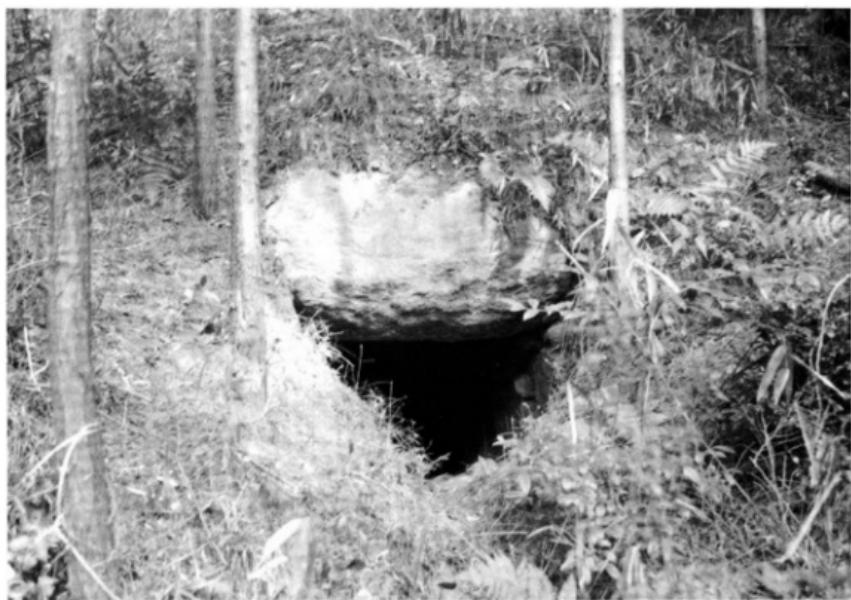
左壁



7号墳



8号墳



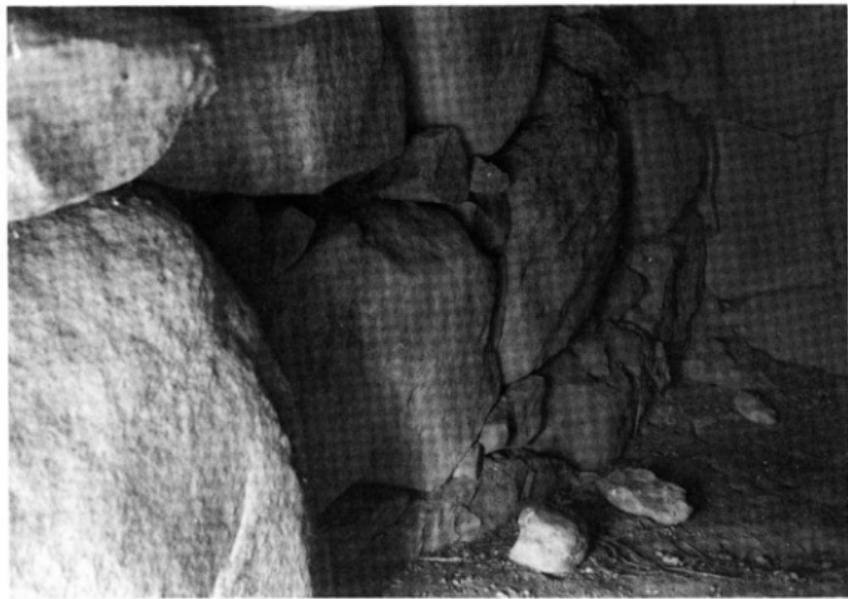
全景



奥壁



左壁



右壁

明神山系遺跡分布調査概報Ⅱ

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和61年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

